

# 車くるま座ざ しまなみ トーク!

大三島を日本でいちばん住みたい島にするプロジェクト2015

## 車座しまなみトーク!夏の会

報告書

平成27年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

2015年7月3日と4日の2日間、大三島ふるさと憩の家にて「車座しまなみトーク!夏の会」が開催されました。7月3日には「大三島の魅力を語ろう」、7月4日は「大三島の食の恵みを語ろう」のトークセッションに続き、高知を拠点に活躍するデザイナー、梅原真さんが「絶体絶命のデザイン」をテーマに講演。会場に並べられた座布団が全部埋まるほどの熱気の中、登壇者と会場の参加者の皆さんによる活発な意見交換が行われました。



車座になってざっくばらんに意見交換

### 実行委員会より

大三島を日本でいちばん住みたい島にするプロジェクト実行委員会です。私たちは、2012年から「伊東建築塾」として今治市伊東豊雄建築ミュージアムが建つ大三島で合宿を行っています。島を訪れるたび、風景の美しさや穏やかな気候、人びとの生き方に惹かれるようになり、自主的に島に通いはじめました。はじめは島での暮らしを描いた絵本を制作したり、島の高校生たちと一緒に大山祇神社参道の歴史を調べて展示したり、徐々に活動は本格化し、2014年からは参道の空き家を改修して、人びとが集まる場所づくりに取り組んでいます。このような活動を通して、観光で島を楽しむこと以上に「都会での生活とは違う、島でしかできない暮らしをしてみたい」と想い、またそのプロセスを島に住む人と一緒に手を組んでつくっていければと考え、実行委員会を立ち上げました。その第一弾として、お互いの自己紹介も兼ねた「車座しまなみトーク!夏の会」を2015年7月3日と4日の2日間に渡って大三島ふるさと憩の家で開催しました。そのレポートをフリーディスカッションでMCを務めていただいた、デザイン編集者の関康子さんにお願いました。



今治市伊東豊雄建築ミュージアムでの夏合宿



改修中の「大三島みんなの家」(旧法務局)



車座しまなみトーク!夏の会の様子



島内外の人が語り合う車座しまなみトーク!

## Part1

### 車座しなみトーク!

## 「大三島の魅力を語ろう」

2015年7月3日(金) 15:00-17:00



## 大三島の魅力って何だろう?

地域の人たちが一体となる祭り、貴重な動植物が生息する里山、歴史ある大山祇神社と参道、しまなみの美しい自然や光などを語り合いました。なかでも印象的だったのは、かつての大山祇神社の参道の思い出。西瀬戸自動車道(しまなみ海道)開通以前、多くの参拝者は宮浦港から参道を通して神社を詣で、参道は土産物屋も含む映画館や銭湯など日常的な店も軒を連ねて活気に満ち溢れていたということです。また、大三島の伝統である祭り、なかでも宗方地区の権伝馬は、3つのチームに分かれ老若男女が一つとなって豪快なレースを行う一大イベント。宗方に限らず、大三島では13ある各集落がこうした祭りを通して、今でも強い絆を守っています。そして、登壇者の多くが開放的で明るい、人情に厚い「人々」こそが、大三島の最大の財産であると語りました。

### 小笠原享さん(今治市教育委員会文化振興課)



実家は参道の牛乳屋で、子どもの頃よく高校生がパンを買いにきていたのを覚えています。たくさんの参拝者がこの道から詣っていた頃の賑わいを取り戻せたらと思います。

### 藤原善和さん(宗方住人)



四国百名山のひとつである鷲ヶ頭山も大三島の魅力のひとつです。さまざまなルートがあり、初心者から上級者まで楽しめます。山を登っていると、日本海側から瀬戸内に至るやまなみ・しまなみルートが整備されて、県外からの登山客が増えていることを感じます。

### 田村信生さん(新居浜南高校教員)

大三島分校に勤務していた9年間、生徒たちと参道調査を行い、参道案内ツアーをつくりました。部活や学校行事にも島民の皆さんが協力してくださる、大三島は何よりも人が魅力です。



### 市川貞男さん、藤原正富さん、大内正清さん(宗方住民)

権伝馬や祭りは、集落の絆を深めます。最近では有志で『ふるさと通信』を発行していて、島外に居る人とも交流を続けると共に、Iターン家族も積極的に受け入れています。



### 藤原幸子さん(旅館茶梅)



1776年の江戸期、1884年の明治期、1976年昭和期、そして1991年の平成の記録をたどることによって、門前町としてのかつての新地町の様子や、風景も大きく変貌していることがわかります。

### 今村有佐さん(肥海住民)



2人の子育て中です。ここの海、山、そして畑付きの築89年の一軒家に惹かれて引っ越してきました。最近では天然塩づくりに挑戦し、昔の人がどれだけ苦労して塩を手に入れていたのかを体感しました。

### 小澤潤さん、菅則子さん(大三島の自然を守る会)

大三島は生物多様性がとても豊かです。それは塩田、湿地、干潟、田んぼなど、人間の手で世話をされている自然があるからです。ホットスポットである大三島の自然を守り伝えていきます。



### 西原昭廣さん(水墨画家)

以前は、外洋船に乗って世界各地を巡ってしていました。大三島に戻ってきて改めて感じた島の魅力や歴史を水墨画の紙芝居にして後世へ伝える活動をしています。



### 須永泰由さん(サイクリスト、伊東塾塾生)



自転車で島を走っていると適度な坂道と風の気持ちよさを体感できます。時間の経過によって光が移り変わり、夕日の美しさは言葉では語れません。

### 太田佳代子(建築キュレーター)

大三島に初めて訪れた時、大山祇神社のたたずまいと巨大な楠に惹きつけられました。瀬戸内海で特別な地位を占めていたこの島の歴史と物語を掘り起こしたいと思っています。

## Part2

### 車座しなみトーク!

## 「大三島の食の恵みを語ろう」

2015年7月4日(土) 10:00-12:00



## 大三島の食の恵みとは?

今回は島外からのIターン、Uターンで現在農業を営んでいる方々にもご登壇頂きました。そんな経緯を持っているからこそ、大三島に生まれ育った根っからの島民の方にとって当たり前のも事も違った視点でとらえ、貴重であると感じられると考えました。Iターンの農家の方々に共通しているのは、「本気で生きたい」「自然と共に暮らしたい」「島の環境を守り伝えたい」「人とつながりを大切にしたい」という意識。さらに、こうした気持ちを共有できる仲間と連携しながら、自分が納得できる、安全・安心な農作物や加工品を、それを求める顧客に確実に届けるという活動を一步一步実行していることです。こうした姿勢は、20世紀の効率最優先だった農業とは異なる新しい仕組みづくりにつながっていくことでしょう。

### 林豊さん(柑橘農家、養蜂家)



大三島の魅力は「採って、食べて、暮らす」というライフスタイルにつきます。釣りや山菜採りだけでなく、今は誰も食べない海藻をてんぷらにするなど、食材や料理法の発見も楽しんでいます。

### 井上正道さん、貞子さん(KiKi's母ハウス)



私たちが小さい頃はいろんな味を体験しながら、体で知識を得ていました。最近の野菜はえぐみや苦みなどの味の多様性の大切さが失われていることが残念です。老後は都会で自由に過ごしたいなどと考えたこともありましたが、母の死を通して島での絆の有難さに触れて、ここで生きて行くことに誇りを感じています。

### 鍋島悠弥さん(柑橘農家)

盛地区で農家民宿の開業を目指しながら、地域と一体となった教育旅行受入などのグリーンツーリズムにも関わっています。盛は祭も大きな魅力で、人と人を繋ぐ大切な行事であると感じています。



### 吉川努さん(野菜農家)

神奈川県からIターンしてきて、種の採れる在来種の野菜をつくっています。昔の農家は種採りは当たり前、それを親から子、子から孫へとつないでいました。そんな農法を実践しています。



### 越智敬三さん(柑橘農家、恵回会)



恵回会は相互研鑽による栽培技術の向上を目的にした組織です。僕は13年前に帰島してミカン農家になって以来品質管理を徹底するなど工夫をして、お客さんに喜んでもらうことで販路拡大してきました。

### 川田祐輔さん(大三島でワインを造る会)



6月にワイン造りのために移住してきました。シャルドネとヴィオニエという品種を育てています。成長も順調なので、3年後に委託醸造、10年後には自社生産で大三島ワインができる計画です。

### 花澤伸浩さん(柑橘農家)

家族の幸せを考える農業をモットーに、柑橘類を自然農法で生産、直販しています。コンフィチュールやジュース等も自家農園のものと、できるだけ愛媛産のものを使用して加工販売しています。



### 渡邊秀典さん(しまなみイノシシ活用隊)

大三島では農作物を食い荒らすイノシシが年間800頭ほど捕獲されています。そのため、イノシシ活用隊を組織して、加工肉を製造したり、解体ツアーを企画して、命をいただく大切さを伝える活動も行っています。



### 超智資行さん(べじべじ自然農園)



1998年に大阪から移住して、自然農法を始めました。いま私の圃地では、野鳥が子育てするまでになりました。「人と自然と農業と」をスローガンに取り組んでいます。

### 関康子さん(デザイン編集者)

ここでは当たり前の日本産レモンは東京では高価です。けれど安全なので購入して、自宅で作った料理を楽しんでいます。島の特産品や料理を楽しめるレストランがあるといいと思います。

車座しまなみトーク!

## 「絶体絶命のデザイン」

2015年7月4日(土)14:00-16:00



「車座しまなみトーク!夏の会」の締めくくりは、高知を拠点に活躍するデザイナー梅原真さん。梅原さんの仕事はきれいなポスターやお洒落なパッケージをデザインするだけではありません。ある意味で患者の悪いところを治すドクター、あるいは新しいビジネスを育てるアントレプレナーと言えるでしょう。梅原さんにとってデザインとは、「問題解決をするためのソフト」なのです。以下、「絶体絶命のデザイン」をレポートしましょう。



### 一本釣りの薫焼きたたき

高知の鰹漁は燃料の高騰、漁獲高の低下、一本釣りという非効率な漁法から、廃業の危機に。非効率を逆手にとって、手間ひまのかかって無駄がない「薫焼きたたき」に新しい価値を見いだした。



### 砂浜美術館

高知県黒潮町にある全長4キロに及ぶ美しい砂浜を大型リゾート地に開発する話が持ち上がった。砂浜を守りたいという気持ちから協力を募り、Tシャツを吊ってひらひらと見せる「Tシャツアート展」を開催し、今年で26日目。美しい砂浜の風景を守り続けている。



### 四万十茶プロジェクト

梅原さんは、以前四万十川中流域の十和村で暮らした。洪水の時には川の流れて埋もれてしまう「沈下橋」が不便さに代える豊かさを教えてくれたという。十和村は実はお茶の産地だが、多くを静岡に出荷していた。生産者を感じる「手摘み」をキャッチフレーズに商品化を提案。茶畑での営みがある美しい風景を保存できている。



### 四万十地栗プロジェクト

高知県十和村は栗の産地だったが、輸入栗に押され衰退していた。地物であることを強調する戦略をたて、「しまんと地栗」のブランドで栗製品を開発販売。現在はカフェも建設し、十和村の主要産業に成長した。



### 四万十新聞バックプロジェクト

サステナブルは大きなテーマ。梅原さんはビニール袋ではなく、古新聞とでんぶのりだけで丈夫なバックを提案。この活動は注目されて、ベルギーやスウェーデンにも飛び火し、東日本大震災の被災地の復興プロジェクトの一つにもなった。



### 離島ブランドプロジェクト

島根県杵築郡海士町では梅原さんが提案した「ないものはない」をキャッチコピーに町のアイデンティティを確立しつつある。「島にないものを望んでも仕方ない」、「これだけ豊かな自然や人材があるではないか」という、相反する意味が込められている。

このように梅原さんの仕事の基本は「考え方をデザインする」「その土地の力を最大化する」ということ。「大三島を日本でいちばん住みたい島にするプロジェクト2015」にも大きな示唆を与えてくれるものでした。(関康子)

梅原 真 | うめばら まこと

高知市生まれ。一次産業がしっかりしない国はユタカではない。地域の「漁業」「農業」「林業」に「すこ〜〜デザイン」を加え、「あたらしい価値」を作り出すことによって、風景とともにその土地が持つ可能性を持続させるオモシロサをシゴトとしている。「漁師が釣って、漁師が焼いた」のキャッチフレーズでプロデュースした「土佐一本釣り・薫焼きたたき」「ひらひらします」をコンセプトにした砂浜美術館。「ないものはない」海士町など。武蔵野美術大学基礎デザイン学科客員教授。

梅原さん流のデザイン思考は大三島でも大いに参考になると思います。コミュニケーションの大切さと徹底した現場主義に感心しました。私も大三島で島の方々と一緒に頑張っていきたいです。  
(伊東豊雄)

